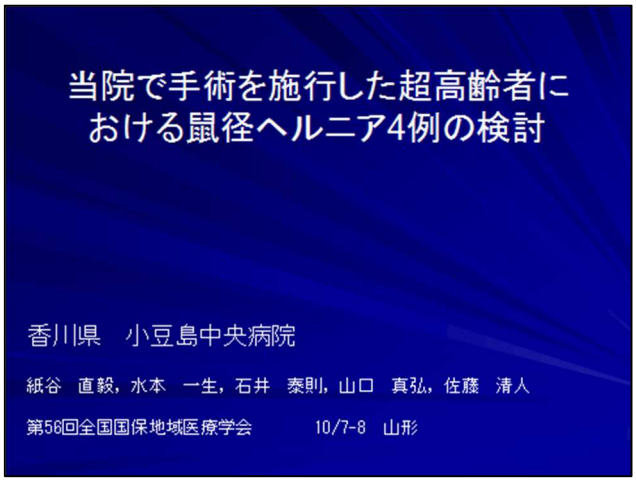
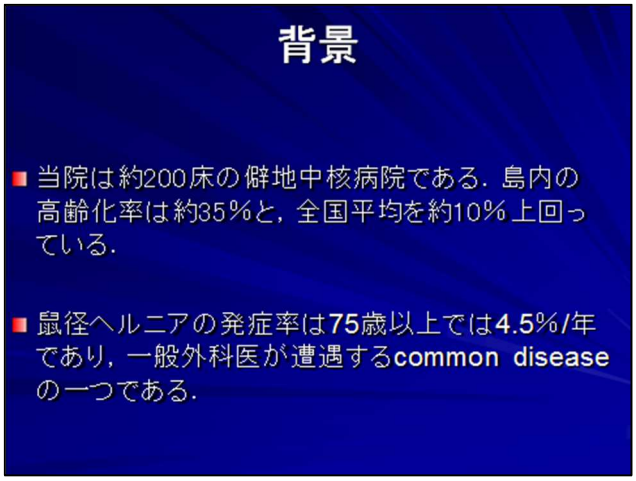
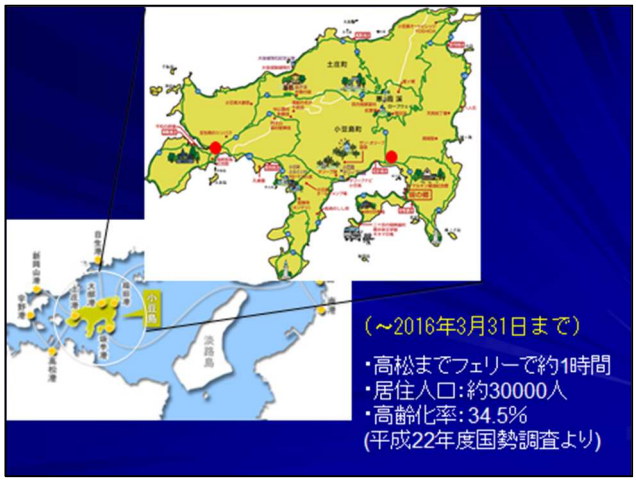
演題 67	当院で手術を施行した超高齢者における鼠径ヘルニア 4 例の検討
	発　表　者　紙谷 直毅（香川県　小豆島中央病院） 共同研究者　水本 一生、石井 泰則、山口 真弘、佐藤 清人

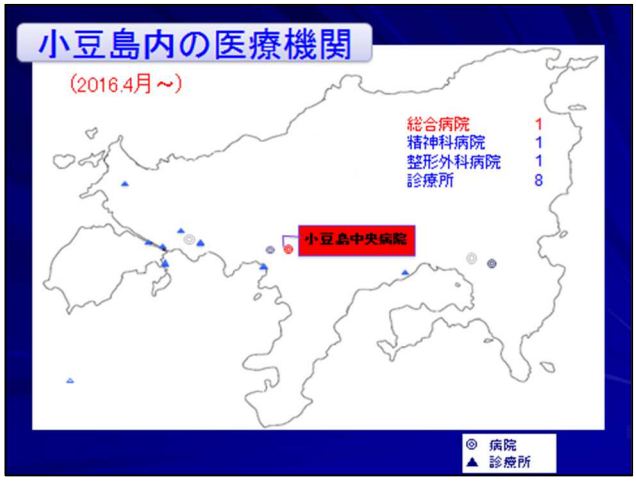




当院は約 200 床の僻地中核病院である。島内の高齢化率は約 35%と、全国平均を約 10%上回っています。また鼠径ヘルニアの発症率は 75 歳以上では 4.5%/年であり、一般外科医が遭遇する common disease の一つと言われています。



小豆島は高松までフェリーで約 1 時間の距離ある離島です。居住人口は約 30,000 人、高齢化率は 34.5%と言われています。



島内の医療機関としては、総合病院が 1 か所、整形外科病院が 1 か所、精神科病院が 1 か所、個人医院が 8 か所存在します。

目的

超高齢者における鼠径ヘルニア4例について，患者背景と手術時間・出血量・術後在院日数・合併症の有無・再発率を含む手術成績について検討した．

超高齢者における鼠径ヘルニア 4 例について、患者背景と手術時間・出血量・術後在院日数・合併症の有無・再発率を含む手術成績について検討しました。

対象と方法

【対象】2015年4月から2016年3月の期間で，当院で手術を施行した超高齢者の鼠径ヘルニア4症例，4病変を対象とした．なお嵌頓による緊急手術症例は除外した．

【診断方法】
1. 診察時に鼠径部膨隆を認め，診断しえた症例．
2. 診察時に確認できない場合は，腹臥位で腹圧をかけ，腹部CT検査を施行．画像上で鼠径ヘルニアと診断しえた症例．

2015 年 4 月から 2016 年 3 月の期間で、当院で手術を施行した超高齢者の鼠径ヘルニア 4 症例、4 病変を対象としました。なお嵌頓による緊急手術症例は除外しました。診断方法は、診察時に鼠径部膨隆を認め、診断しえた症例、または診察時に確認できない場合は、腹臥位で腹圧をかけ、腹部 CT 検査を施行し画像上で鼠径ヘルニアと診断しえた症例としました。

背景因子

性別	－	男性:4例 女性:0例
平均年齢	－	86.3歳(82歳～95歳)
平均Performance status	－	2.25(1～3)
鼠径ヘルニア分類	－	Ⅰ-2型:2例／Ⅰ-3型:2例

手法

【麻酔方法】
- 吸入麻酔(笑気2L/min＋酸素 4L/min) +経静脈麻酔(プロポフォール持続静注)によるGOP麻酔: 3例
- 脊椎クモ膜下腔麻酔(高比重マーカイン):1例

【手術方法】
- 4.5 cmの皮膚切開
- 全例にMesh Plug法(Millikan法)を施行

麻酔方法は、吸入麻酔(笑気 2L/min+酸素 4L/min)+経静脈麻酔(プロポフォール持続静注)による GOP 麻酔が 3 例、脊椎クモ膜下腔麻酔(高比重マーカイン)が 1 例でした。手術方法は 4.5cm の皮膚切開を置き、全例に Mesh Plug 法(Millikan 法)を施行しました。

手術成績

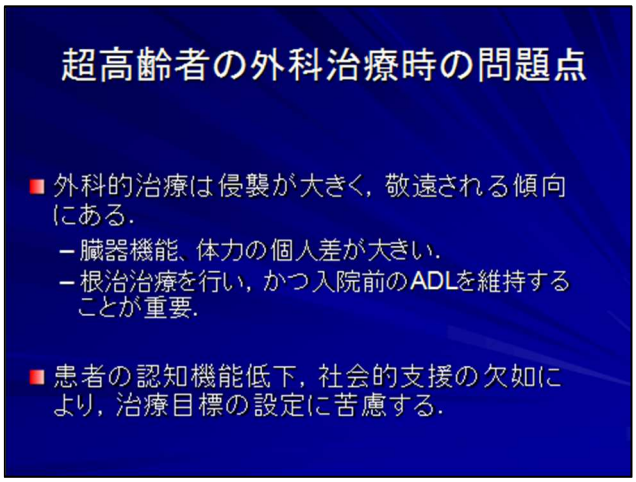
【平均手術時間】75 ± 17 分

【平均出血量】 少量

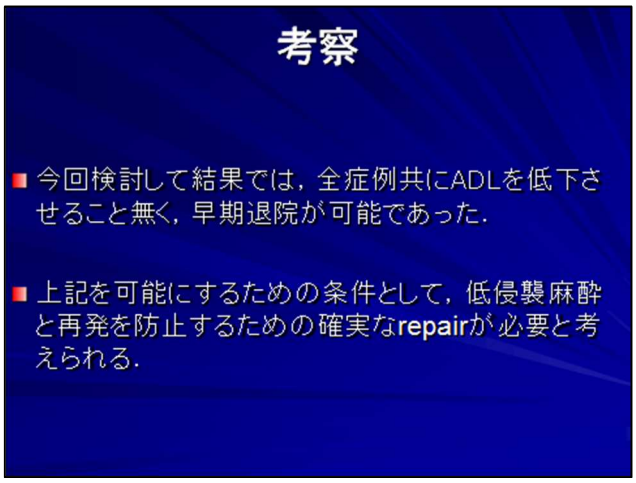
【術後在院日数】1.5日(1～4日)

- 術後合併症は全例共になし．
- 追跡期間は最長8ヶ月だが，現時点で再発は認めず．

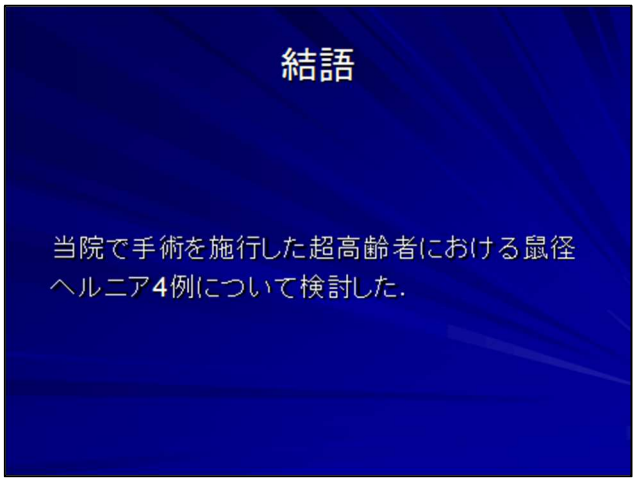
平均手術時間は 75±17 分、平均出血量は少量、術後在院日数は 1.5 日(1～4 日)、術後合併症は全例共にありませんでした。追跡期間は最長 8 ヶ月ですが、現時点で再発を認めておりません。



超高齢者の外科的手術時の問題点として、外科的治療は侵襲が大きく、敬遠される傾向にある、また患者の認知機能低下、社会的支援の欠如により、治療目標の設定に苦慮することが挙げられます。



考察ですが、今回検討して結果では、全症例共にADL を低下させること無く、早期退院が可能でした。これを可能にするための条件として、低侵襲麻酔と再発を防止するための確実な repair が必要と考えられます。



結語です。ありがとうございました。